「　上野焼の里の秋　　」　（　協同組合通信/日和見論弾　）　16.11.24

17 世紀の多才な武将小堀遠州。古田織部に学んだ三大茶人で、三大将軍家光の茶道師範。遠州の指導した七窯の一つ、上野（あがの）焼の里が、万葉集に詠われた香春岳に至る北九州の福智山脈の 901mの最高峰の麓にある。

細川忠興に招かれ開窯した陶工尊階は朝鮮からの渡来人。茶道を遠州に師事し、その意匠を継承し伝統芸が今もある。山紫水明・風光明媚な自然の中、全て天然の薪や天塩にかけた草木灰を使った陶器。清流と濃緑の木肌の色と黒く渋い色で表現した作風で、高鶴の作品は、高円宮家の愛用陶器。

秀吉の朝鮮出兵に発する古き窯元を過ぎ、草深く霊気漂う渓谷がくねっている。その最深部に、鎌倉時代に遡る修験者が鍛えた清澄な白糸の滝がある。秋の一日が深々とした谷間に息づき永遠の時を刻む。滝壷の傍に建つ白木の銘は、墨痕鮮やかな南無妙法蓮華経。轟々と流れ落ちてくる飛沫は緑と紅葉の木漏れ陽に透いて輝く。水の音と山の精に、時と五感が融けてゆく。どこからか現れたトンビの速い飛翔とひらり舞い落ちる数枚の木の葉に、時間が動く。

里の実りの秋は盛沢山の楽しみがある。アケビ採りや山芋掘り。とげに刺され、漆の真っ赤な実の強烈な汁にかぶれ、二の腕や顔がぶつぶつとただれるのも覚悟のうち。目指す蔓を見つけ、両手に息を吹きかけ、木に駈け登り、やっとの思いで掴んだ果肉は野生の香り。いくつかは、カラスに食われて残念無念。山芋掘りには、独特のコツと集中力がいる。重く先の尖った鉄棒で、硬い土や粘土と石ころを慎重に分けて堀り下げる。微妙な力加減の具合次第で、折角の獲物が途中でぽっきり。気長な秋の山遊び。

35 年前の秋、普段と違う裏道で、「かもめの水兵さん」の作曲家・河村光陽の歌碑を見つけ、襟を正した。少年光陽が、熟し柿を齧った山里での想い出が名曲を作ったのだろうと、望郷の想いが重なる。

黒ダイアと呼ばれ親しまれた石炭産業で、一時、賑やかに荒くれた川筋気質の筑豊の町も、エネルギー革命終焉の洗礼を受けた。百年ほど前の静けさに復し、元の寂れた山里に落ち着いた。

（気象情報システム株式会社　高　津　敏　）